

人物
ファイル

前橋市内でありながら、のどかな農村風景が広がる赤城山の裾野で飯野晃子さん(39)は農業法人の社長として有機野菜の生産に取り組む。将来の夢は、ここを有機農業の分野で世界のモデル農場にまで育てることだ。

飯野さんが社長を務めるプレマ(前橋市)は社員が現在約40人。10畝の農地で小松菜を中心にホウレンソウ、カラフルなトウモロコシ「レインボーコーン」などを栽培する。化学合成した農薬や肥料は一切使わず、土作りまで心を配る。小松菜を練り込んだうどんなど加工食品も手がける。

首都圏のスーパーや生協が主な販売先だが、シンガポールの伊勢丹に小



プレマ社長 飯野 晃子氏

松菜を出荷するなど、販路は海外にも広がる。有機JAS認定のほか、農産物の安全性に関する国際認証「グローバルGAP」も取得した。社名はヒンディー語で「博愛」を意味するという。

高校卒業後、津田塾大に進んだ。自炊生活を始める。と、「食事の大切さに気づき、英文科でありながら食や農業に関する本ばかり読むようになった」。東大大学院では専攻を農学に変え、インドの有機農業を研究した。

数度にわたり単身でインドの農村に入り込んで調査。「さまざまな作物を栽培しながら牛や鶏を飼い、自家製肥料まで作っている」農家に出会っ

有機農業、夢は世界モデル

いいの・あきこ 1979年栃木県足利市生まれ、東大院農学生命科学研究科修了。父が創業した農業法人プレマに入り、2015年から社長

たことで、「アジアの小規模な農家でも有機農業は可能だ」と確信する。

研究者の道も考えたが、「有機農業の良さを消費者に伝え、マーケットを広げたい」と、オーガニック食品の販売会社を経て、父が始めた農業法人に入った。当初は加工食品の企画などを担当。その後、他の仕事も多い事業家の父から経営を全面的に引き継いだ。

1児の母。夫の仕事の関係で週の半分は東京、半分は群馬という多忙な毎日だ。社長になってからは、育てにくい味が味のよい在来種の小松菜を栽培したり、宇都宮大と土作りの研究を始めたりと独自色も打ち出す。

「すべて自社農場産の有機農産物で加工食品を作りたい」と、野菜のほかに大豆や小麦の生産も計画するなど、夢はさらに広がる。

(前橋支局長 塚本直樹)

茨城県産 輝き J.A. 手掛 航空 造の 県足利 県を立 ンタ、 し12 軽